

●マイハート		
◇“知る” 喜び	宮崎美子……	3
●連載／教育のひろば		
◇子どもを知ること	佐藤義則……	4
●特集／新学習指導要領を考える		
◇対談：こころが育つ教室の条件	園田雅春＆上杉賢士……	8
●連載／実践報告＋講評と助言		
◇実践報告：「分かり合い力」を高める道徳の授業	内山幹夫……	16
◇講評と助言：大人に連なる「心の教育」	渡邊達生……	19
●連載／実践 子どもの目が変わる		
◇授業を変えるスパイス II	立川修司……	20
●連載／道徳のチカラ		
◇道徳の時間を変える②	土田雄一……	22
●道徳教育の取り組み		
◇道徳項目の核心に迫る授業	鈴木浩文……	24
●連載／こころの行方		
◇不機嫌なリゾート生活	鈴村俊介……	26
●連載／子どもを“思わず”見直したくなる		
◇心に残るひとこと	加藤宣行……	27

本文中の勤務校は平成20年9月1日現在のものです。

●著者プロフィール●

園田雅春先生▶この秋こそ沖縄が北海道に手帳を開いたものの、空白部分は皆無。いつの間にコマネズミのように動き回る人間になったのか、と3度目の成人式を過ぎた千支ネズミ男は独り嘆いています。

上杉賢士先生▶今年の夏に、アメリカからゲストを招いて計5日間に及ぶ大型のセミナーを開催した。「学力問題」への性急な対応に追われるばかりではなく、教育本来のあり方について今こそじっくり取り組みたいと考えている。

内山幹夫先生▶1975年7月26日、愛知県生まれ。A型。小学校時代、父の仕事の関係で、2年間インドネシアに在住。現在は、名古屋市立神宮寺小学校教諭。趣味は、乗馬、アーチェリーなどスポーツ全般。

渡邊達生先生▶車が行きかう交差点の一角に土が吹き寄せられ、トマトが独り生えしていた。はるか昔、南米アンデスの高地で身につけたDNAを引き出す。生きるとは、かくのごとくあるか。人も負けてはならじ。

立川修司先生▶私の「郷土愛」といえば、響灘や玄界灘でとれる新鮮な（！）魚介類です。郷土の自然や文化に触れ、郷土への愛着を深めるためと苦しい言い訳をしながら、身をもって郷土の「食」を楽しんでいます。

土田雄一先生▶ちょっと忙しかったら6キロほどやせました。どこか悪いのかと心配しましたが、人間ドックの結果は以前より健康体。心も身体も軽く元気なのはよいのですが、洋服のサイズが変わったのが残念。

鈴木浩文先生▶ラーメンと道徳の授業が大好きな、今年4年目30歳です。まだまだ未熟者ですが、道徳職人目指して現在修行中です。二学期は他のクラスへの出張修行を考えています。

加藤宣行先生▶運動会直前の慌ただしい日々です。本校は巷の流れに逆行（？）し、とことん勝負にこだわります。子どもも教師も本気にならざるを得ない、この雰囲気が好きです。

—子どもを知ること—

元プロ野球選手・コーチ 佐藤 義則



人生の先輩が作ってくれた野球への道

私は中学校まで奥尻島にいたんだけど、普通に家の手伝いしながら学校行って、普通に友達と遊んで……。都会じゃない田舎だし、今みたいな時代でもないし。勉強はあまりしなかったけどね。そのころは、私のところだけじゃなくて皆の家が漁師であったり、自分の家で食べるものは全部、自分で作ったりしていたんでね。それを家族で手伝いながら中学校までやってきたかなって感じ。だからもう、小学校はここで、中学校はここに行くってことに決まってるからね。都会みたいにい学校を選んでこの学校に行くってわけじゃないから。

今の子どもは夢がもちにくっていわれているけど、じゃあ私らのころはというと、奥尻島にいて特に夢なんかもたないよね。周りしかないもん。友達と好きな野球やったりしていたけど、ウチは漁師だったから、将来は兄貴と二人で親父の船に乗って手伝いをするかなあ、っていうぐらいの考えでしかなかったね。今みたいにあれもありこれもあり、テレビもあり、何でもすぐ目に入るっていう、そんな時代じゃない。それに今みたいに何でもある時代じゃないから、今だったら、例えばプロ野球に行きたい、っていうことなら親が一生懸命教えてくれたり、野球チームに通わせてくれたりするんだろうけど、そういう時代じゃない。普通に学校に行って勉強して、日曜日は友達と野球やったりサッカーやったり、そういう生活だったよね。だから、あれになりたい、これをやりたい、だからそこに行こう、ということは全然なかったね。夢をもつとかもたないとか考えなかったよね。

だから、そのころはプロ野球選手になれるなん

てまったく思ってなかったし、あこがれていた選手とか目標にしていた選手とか、そんなのいなかった。あのころは皆そうだったんじゃないかな。親父が一生懸命働いて、それを家族で手伝いながら生活していたわけだから、プロになってあそこへ行こうと思っていたとか、そんなの全然ないよね。高校になってテレビで野球を見るようになって、王さんとか長嶋さんとかすごいスーパースターを見たけど、それでもプロに行こうとか思わなかったからね。何でもそうだけど、やっぱり自分の力の中で考えることなんだけれども、北海道でやっている分にはあの選手までになったらプロに行けるんだっていう対象になる相手がないから、目標がないよね。自分のレベルがどんなんかもわからないし……。

そういう中で、野球をやっていて、中学校のとき大会で勝って、その次の大会でも勝って、函館まで行った。そこで有斗高校の監督、部長がテストに来てくれてね。そういうだれかが現れてくれたから、次の段階に行けたっていう感じ。自分がそこに行こうと思ってやってきたんじゃないで、それをやってたら目をつけてくれたっていうことだよ。それで高校に行って野球を一生懸命やって、甲子園目指して3年間やって、まあ結局だめだったけども、まあまあ頑張れた。それで就職しようと思ったときに、長谷川さんというおじいちゃんが有斗高校に来てくれて、日大のテスト受けてくれないかっていうことになってね。銀行に就職決まっていたんだけど一応テストだけっていうことで。やっぱり自分と同じ甲子園目指して同級生がどれくらいの野球やるのかなっていう興味もあったからね。セレクションという野球のテストがあって100人近く来るから、それを見たくて東京まで行ったんだけど。

その長谷川さんっていう人が有斗高校に来てくれなかったら拓殖銀行に入ってたからね。もう自分では行くなって決めてたから。何かの節目のときにそういう人が現れてくれる。そういう感じで、そこに行くから頑張ったんじゃないくて、今やることを頑張ってたなら、自分の考えてないほうに人が現れてくれて、それで行ったって感じ。だから大学にも行ったけど、そのときもまだプロに行くとかじゃなく、「4年間大学に行っても拓殖銀行には戻れるだろう」というふうに口説かれてね。それで学校へ帰って担任と監督に相談したら、「東京に行って野球やりたいんだったら行ってもいいよ。拓殖銀行は断ってやる」と言われて。それなら東京で、大学でやってみたいなあと思ってね。やっぱり北海道は11月から3月、4月くらいまで野球できないからね。1年間外で野球できるところでやってみたいと。ほんとは早く働いて金稼ぎたかったんだけど、どうもそれが後々になっちゃって、とにかくいちばん嫌いな勉強のほうへ行かされてしまったって感じだよ(笑)。

でも自分の人生の中でだれかが現れてくれるっていうことはすごく大事なことだと思うよね。

“今日一日を一生懸命に”の積み重ね

現役のときに大きな病気をして入院したことについて皆によく聞かれるけど、その場ではあんまり自分で深く考えてないからねえ。そりゃまあ病気がしたのはもうたいへんなことであったけどね、1年間プレーがないわけだから。でも若かったし治ればまだ野球できると思ってたからね。1年間、入院して通院して病気を治すことだけで、野球のことはほとんど考えられなかったしね。ほとんど寝たっきりだったから、嫁さんに運転してもらって、2時間ぐらいかかる病院にずっと通って。そのおかげでその先生のところでまあまあよくなって。それでコーチが手術するんだったらここでやろうかっていうところを紹介してくれた。そこでトレーニングの先生のところで動いてみたら、あっ、全然大丈夫だって。椎間板分離症っていう病気で、周りの筋肉でカバーすれば、野球はできる。その先生もつきっきりで教えてくれてやってくれた。1か月ぐらいでもうよくなったからね。

途中であきらめようと思ったことはないね。ちょうど自分がフォームを修正するのに毎日、梶本

*梶本隆夫：元プロ野球選手。当時は阪急の投手コーチ。

さんって人に教えてもらって練習していて、ようやく完璧になって、15以上は絶対勝てるくらいよくなったからね。そのときにそういう病気になったんだけど……。周りはもう駄目だろうと思ってたんだろうけど。1年間外に行かず、だれにも会ってないからね。後で皆にはよく治ったねって言われたけど、治ればまた野球できるってのはあったから。だからあきらめることはできなかったね。

皆に長くやるのはどうするんですか、ってよく質問されるけど、そんなの考えてやってないもんね。今日一日を一生懸命やってるだけで、その結果がそうになっていっただけで。まあ野球の場合は15勝とうとか20勝とうとかは目標立てるけど、それ以外はこうなろうとか、あそこまで行こうとか思ってやったことないね。じゃあ20年やろうかなって思ってだれもやってないからね。何でも積み重ねだから、その積み重ねの中で、じゃあこれ練習しようとかあれをやろうとかやっているだけで、その中でいい練習ができれば長くできるし。まあ故障も少なかったしね。大きいのはあの病気だけだからね。

延長12回216球完投のときもそうだよ。そのときは球数とか気にならなかったから。それが投げ終わったら200球投げてたってやつ(笑)。まあ、さすがに疲れたけどね。12回に味方の点数がゼロだったら、投げるのやめたって言おうと思ってたもん(笑)。

子ども(選手)は指導者しだい

まあ、でも代えられたときは抑えて欲しいなあとは思っているけど、そのまま勝ったらありがたうで、逆転負けしたらしょうがないなあってあきらめるしかないよね。マウンド降りる自分が悪いと思ってるからね。

だから95年の優勝を決めるグリーンスタジアム神戸の試合でも平井が打たれて逆転されたんだけど、あいつが打たれたからってどうのこうの何にも思わないよね。あのシーズンは、あいつが抑えをやってくれて優勝できたわけだから。全然気にすることはないよね。皆でやってることだから。一人でやってるわけじゃないんだから。

子どもたちの野球の試合でも、先発ピッチャーの子どもが、代わった後に投げて打たれた子どもを責めたりしちゃいけないよね。そういうふう

*平井正史：現中日ドラゴンズ投手

責める子どもがいるってことは監督が悪いっていうことだよ。やっぱり教育してる人がそういうふうに教えていけないといけない。子どもじゃ考えられないから。プロでコーチやってても、野手がエラーしても絶対顔に出すとか教えるからね。そういうのはもう子どもじゃなくて、監督とかそういう人が、教えていけないといけないね。例えばあいさつのできないチームだったら、監督が何も教えていないってことだからね。子どもらはそれでいいんだと思ってるから。

自分で工夫することが大事

それから自分で考えていろいろ工夫しようと思えることが大事だと思うよね。例えば“ヨシボール”^{*}なんだけど、これはもう、自分が試合で投げている中で、あのバッターを打ち取りたいって気持ちからで上がったボール。それを投げようじゃなくて、自分がカーブ投げて、カーブでストライク取って、そのカーブみたいな感じでバッターを空振りさせたいっていうのが常にあるって、それが腕を強く振ることによってボールが小さく変化して、それをまた、ひねり方と放すときにちょっと工夫して覚えたボールだよ。緩いカーブ投げて早いカーブ投げて、それがどんどん進化して、フォークボールみたいになった。

今のピッチャーは自分の投げたい握りでシュートならシュート投げて、って感じだからそれでいいと思うんだよね。カーブっていうのはこうして絶対握りなさいっていうのはないからね。まあストレートの場合はあるけど。あとは変化がどうするかって自分でわかれば、どういうふうに握ってもいいと思う。皆、手の長さも指の長さも違うし、足の長い子、短い子、腕の長いピッチャーもいれば短いピッチャーもいるわけだから、それぞれの教え方が違うからね。そういうのを見極めないと教えられない。

コーチは選手の特長を知って信頼される

やっぱり選手には認めてもらわないといけない。そこがコーチとしていちばん大事なことだよ。信頼されるってことがね。コーチの場合は、教えてることに納得してもらわないといけないけど、それには、例えばピッチャーの場合、いいときと悪いときのフォームをちゃんと見てやることが大

^{*}佐藤氏オリジナルの変化球

事だね。特にいいときのフォームは絶対覚えておかないといけない。いいときはこうで、今はこうなってるよっていうふうに説明しないといけないから。悪いところを直すんじゃなくて、いいときのことを覚えておいて、そこに戻す。いいところを伸ばしながら悪いところをちょっとずつ直していく。悪いのを直すのは一から十までやらないといけないし、時間かかるんだね。だから150キロ出るんだったら、150キロ出しながらコントロールをつけていく。そういう練習をする。せっかく150キロ投げられるのに、コントロールはよくなったけど145キロしか出なくなったら何にも意味ないからね。それだと特長、長所が伸びていないってことだから。そう指導をしていれば信頼というものは自然と生まれてくるんだね。

それからピッチャーでも怒っていいやつと怒っちゃダメなやつといるわけ。弱いやつは怒っちゃうとキャッチャーまでボール届かなくなる(笑)。ビビっちゃってさ。怒られて頑張るやつと、ショボンとしちゃうやつといるんだから、プロでも。だから同じように失敗したら怒られて頑張るほうを怒る。怒るっていうか注意するよね。そうすると、あ、こういうことすると怒られるんだなってショボンとしちゃうやつもわかるわけだね。そういうのを見分けないといけない。怒られないようになったらダメだっていう言葉もあるけどそれみたいなもんよ。期待してるから怒るんであって、よくなって欲しいから怒るんであってね。で、結果出したらほめてやればいいしね。そういう性格も見てやんないといけない。そういうのが教育だと思うけどな。

先生たちも子どものことをしっかりと見ておくということが、「1 + 1 = 2」って教えるよりも大事じゃないかと思うんだよね。この子はこういう性格してるっていうのを把握できれば、「あ、こいつはちょっと今回テスト悪かったから悩んでるな」とかね。そこで少しアドバイスしたりすれば、また頑張れるんじゃないかなと思うんだよ。

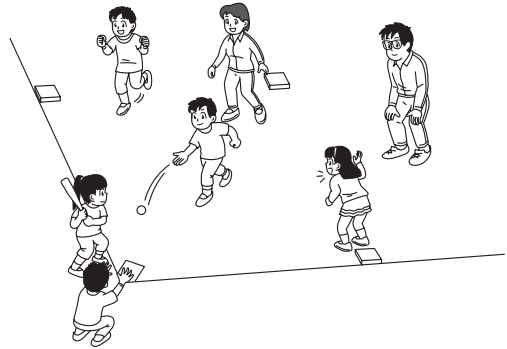
それに全部平等じゃないといけないと思うよ。勉強できる子できない子っているけど、まあ選手でもそうだけど、いいやつは教えなくてもいいわけよ、勝手に良くなるんだから(笑)。下のほうをウロウロしてるやつを一生懸命してやんないと。私がダルビッシュを育てたって皆言ってくれるけ

ど、だれが教えたって良くなるよ(笑)。だから中継ぎなんかでも、勝ちゲームで投げさせたことによって自信つくよね、それで抑えられれば。いつも負けゲームばかりだったらやっぱりね。今日は負け試合だから打たれてもいいやって思われるのがいちばん困るわけ。だからちょっと点数の余裕のあるときは、いつも負けゲームで投げるピッチャーを使ってやる。それで今度は一点差で勝ってる試合でも投げられるようになればね。勝ってるゲームでも投げられるようにしてやるのが私たちの仕事だから。

子どもは好きなことには努力する

まあ勉強は確かにちゃんとやらなきゃいけないけど、やっぱり一生懸命、習ったことを繰り返しやったやつが、早く勉強できるようになるんじゃないかな。野球でも、「あれ、いつの間にこんなにうまくなったんだろう」というやつは努力してるやつだよ。プロに入ってきてても野球を好きなやつと嫌いなやつという。それ言ったら皆、えー、とか言うけど、それは確かにプロに入りたくて入ってきてるんだけど、入ってしまったらそこで終わっちゃうやつもいるから。練習とか見てたらわかるもん。ああ、こいつはあんまり好きじゃねえなあって。努力しないもん。好きなやつは全体の練習終わってもバッターが特打ちやってたら、球拾いしながら走ったり、球拾い手伝ってる。あんまり好きじゃないやつは帰っちゃう。そういうところ見てたらわかるよ。下手でもいいと思うんだよね。好きになんないといけない。好きになれば練習するし努力するから、下手でも上手くなるよね。

それで、好きにするためにはやっぱり子どもらが、まあ私たちの場合は選手だけでもね、いつでも入って来られるような、相談する場をいつも開けていてやらないといけないよね。ただ「おい、 $1+1=2$ だぞ」と言って、授業終わりましたって教室からいなくなったら、だれも相談来ないよね。こっちから言ってもかかないと、待っててもやっぱり質問することがわからない場合もあると思うんだよね。そいつらがいつでも聞けるものを開けていてやらんといけない。生徒がホントに安心して相談に行けるには、いつも受け入れる態勢をしてくれてないといかんよね。そうすればまた、信頼関係というものも生まれてくるしね。



教師も子どももいっしょの場を

私たちのころは、中学校の野球部って、田舎で試合する相手も少ないから学校にいる男の先生らと野球の試合をしてた。授業終わってからね。全然試合しないとうまくなんないからって。監督が先生だから、監督が今日試合しようよって言ったら、教員が全部手伝ってくれたの。田舎だからできたのかどうか知らないけど。例えばボール捕れない先生もいたけども、人数いればいいからね。そういうふうにいっしょにやってきた。学校もそんなに大きくないからできたのかもしれないけど、でももっと大きい学校だったらもっと先生がいるわけだからね。今は中学校の野球部っていうのがなくなりつつあるからね。少年野球的なそっちに行っちゃうから。そういうところから先生と生徒っていうのが離れていってるのかなって思うよね。

だから勉強の教室の中だけいっしょじゃなくて、そういうところでいっしょに子どもらと遊ぶ時間があれば、もっと楽しいんじゃないかなと。皆で助け合ってやらないといけないからね。私たちはホントに小っちゃい島だったから「今日、野球やろうよ、試合やろうよ」と言ったら皆「いいよ」と手伝ってくれる。そういう教育だったね。

小学校のときは、私たちの場合は田舎だから遊ぶ仲間がいつもいっしょだった。今日は日曜日だから皆でやろうか、土曜日だったら午前中で終わるから昼から野球やろうかって、いつも同じことして遊んでた。勉強以外でもいつもいっしょだから仲よしになっていく。ただ学校でだけ、野球のチームに入ってるときだけいっしょってなると、なかなかそういう仲間はできないよね。今はそういう場所がなさ過ぎるっていう感じがするね。(談)

阪急、オリックスにて活躍。最多勝・最優秀防御率などのタイトルを獲得。40歳11か月で史上最年長ノーヒットノーラン(当時)達成。現役引退後は日本ハムなどでコーチを歴任しダルビッシュ投手らを育成。通算成績165勝137敗48セーブ、防御率3.97、1755奪三振。

対談：こころが 育つ 教室の条件 ～学級担任の仕事で大切なこと～



●出席● 大阪教育大学教授 園田 雅春
千葉大学大学院教授 上杉 賢士

◆子どもを危機的状況から救うのは

上杉 早速ですが、「こころが育つ教室の条件」というテーマで議論をして参りたいと考えます。まず最初に、今回、学習指導要領が改訂され、解説書がわれわれの目に留まる形で表示されました。この改訂を受けて、その中からいったいどのような課題を引っ張り出し、ポイントとなる点は何なのかというあたりについてざっと整理をしていきたいと思ひます。今回の学習指導要領の改訂を園田先生ご自身は、実際にどのようにとらえていらっしゃるでしょうか？

園田 総合学習の時間が減り、教科の学習に相当シフトされましたね。そんな中でもなお、道徳を全教育活動の中で、ということがよりいっそう強調されました。それには背景があるわけで、子どもの厳しい状況、社会的なさまざまなできごと、これらを道徳教育を梃子に何とか改めねばという思いというものはよくわかります。しかしながら、では具体的に何をしていくのかということについては、現場の目線からしてもなかなか、前回と比べて見えてこないのではなからうかと思ひます。私自身の実感としても、「重要だ。だから重点化を」、あるいは戦前の言葉でいえば修身科というの

が首位教科と言われたのと同じような形で、今回も道徳という領域を位置づけようという思いがあるのでしょうか。具体的に、今日的にはそれがどのように機能することが、最も子どもにとっても居心地のよい人生になるのか、という視座で考えたいところです。

上杉 そうですね。今回の改訂で特に目を引くのは、これまでずっと、いわゆる内容項目として示されてきた事柄とは別に、例えば「生命尊重の精神を養う」であるとか、あるいは「自立心、自律性」の問題であるとか、それから「規範意識の涵養」とか、特に強調された問題がありますね。私はこれを見て、今回の学習指導要領改訂の背景には、子どもの状況に対する相当な危機感のようなもの、子どもの暮らしや状況がかなり思わしくない方向に向いている、という認識があるような気がしています。これは小・中学生に限らないのですが、さまざまな問題が起き、事件が起き、そういった中でいったい人間の心ってどうなっていくのだろう、というたいへんな危惧を私も抱くわけですが、ただ「きちっとした教育をせよ」ということだけで問題が解決するかどうかという、そうではない。つまり、「足りないところを、きちっと力を入れて教育をせよ」ということだけでは、

仮にそのように教育が行われたとしても、そう簡単には問題は解決しないだろうという見方をしているのですが。

園田 まったく同感です。子どもの起こす事件も、ある意味では社会的で構造的なものです。したがって学校において何々の時間だけで、ということではとうてい根本的な解決に至らない。家庭的な重たい背景を背負っている子どももいるでしょう。それは経済的な問題だけでなく内面の問題を含めてね。そういう意味では道徳の時間、あるいは道徳教育に願いが強すぎてか、あまりにも重たくなり過ぎて、結果的に何を焦点化して学校で子どもたちと学び合うのかということが、へたをすれば霞んでしまいますね。これは指導要領を読み込みながら、学校現場で、学校の実情、子どもの実態に即して、計画的な取り組みがどう行われていくかということにかかってきます。ですから、「やりなさい。重要だから」、そして担当教員をつけてという枠組みは規定されても、一方でそれを本当に実現できるには、教師がゆとりをなくしては絶対できないですね。これは声を大きくして言っておきたいところです。

上杉 そうですね。少なくとも子どもの暮らしぶりに何か抜き差しならない問題が生じているところでは、おそらくどなたも異論ないだろうと思うんです。問題は、そういう事態をどうやって好転させていくのかといったときに、何かあることに特に力を入れて教育をすればその問題が解決するわけではないという、つまりそれほど根が深く構造的な問題であるわけです。私も道徳教育にかかわってきて30年以上経ちますので学習指導要領の改訂を迎えるのが実は4回目なんです。この間に起きてきた変化を私なりに整理しますと、道徳の時間が計画通りに実施される割合というのは年々、改訂を重ねるたびに、間違いなく高くなってきている。簡単に言えば、先生たちは道徳の授業をちゃんとやるようになってきた。その一方で子どもの問題は年々深刻の度合いを増している。つまり、通常の授業を計画通りにやっても、子どもの問題は解決しないどころか全体としては徐々に状況は悪くなっている。そう考えますと、ただ週1時間の授業をきちんとやるとか、計画に従って教育を推し進めるだけでは本質的な解決にならない、という感想をもっております。

◆子どもたちに自信と希望を！

上杉 それではいったい、実態に即して実効性のある教育を推し進めるために、われわれはどう子どもにかかわっていけばいいのか。場合によっては、子どもだけではなく子どもを取り巻く社会全体に対するある種の見方であるとか働きかけそのものも、共通的に理解をして、そういう方向に教育を向けていく努力が必要になろうかと思うんですね。そう考えますと、改めて心の教育、生き方の教育というのはいったいどうあることが望ましいのか、どうあるべきかという点で、学習指導要領を若干離れて考えてみたいと思います。

園田 ひと言でいえば、子どもたちの今を生きる自信と明日を生きる希望、これを学校教育を通じて少しでも得られれば、子どもも教師も目の輝きが変わってくるはずだが、それをどう具体化していくのかということに尽きると思っているのです。

確かに時間、年間計画をきちっと現場がやっているにもかかわらず、子どものさまざまな実情は好転していない。ですから、あらゆる授業や教育活動を通じて、自信と希望が蓄積されていっているのだろうかという疑問もあります。学生と話をしていても、学校教育を受けたがゆえに、あるいは担任制度の中で先生と出会ったがゆえに自分に自信をなくしたとか、友達に対する信頼感を損ねたなどということが聞かれます。学校の存在に対して根本的な問い直しが必要だなと思うことがあります。そこで、まずゼロから出発をして、そしてなおプラスの方向で何か手応えのあるものが授業の中で一つ二つと子どもと共有できていけば、勉強って楽しいなあ、あるいは学校へ来て得したとか、もっと言えば生まれてきて得したってぐらいのね。死ぬことなんて怖いだけで考えたくなくて、今生きているうちに存分に人生を謳歌したい、という原動力を蓄えてほしいと思います。それを小学校期から蓄積していけば、まだまだ子どもたちと私たちの社会は、今も将来も見捨てたものじゃなくなると思うんですけれどもね。

上杉 今、端的に自信と希望と二つご指摘いただきましたが、まったく同感です。無論、この自信と希望というのは、かなり密接につながっているものですが、あえて私なりにそれぞれ別々にとらえてみようと思います。一つは子どもたちが



園田雅春先生

今の自分に自信をもつということ。園田先生はあるところで、子どもたちが自尊感情、すなわち自分ってなかなかいいやつだよなと思える感情、それをもたせることが重要だとお書きになったのを読んだことがあります。やはりこの点がまずもってきわめて重要なポイントですね。学校に来て仲間といっしょに暮らすことは本来、いろいろな仲間、教師とかかわり、さまざまな人、事物とかかわりながら、一つ一つこれから先を生きていく自信を溜めこんでいく。そういう営みであったはずなんですが、逆に人と出会っていろいろな経験を重ねるたびに自信を失っていく。そういう現象があるような気がしてなりません。一つは、昔からよくいわれている相対評価。周りとは比べて自分の位置がどうであるかというとらえ方。これはなかなか一般的に根強くはびこっていますので、例えば何か一つ、子どもが自分なりに納得できることを成し遂げたときに、それが相対的に他と比べてどのくらいの価値があるものかという見方を周囲のほうはつついしてしましますね。子どもにとっては天にも昇るような気持ちでいるのに必ずしも周囲からはそのように評価されない、という環境の中で、せっかくの日々の営みが自信の蓄積という方向に向いていない。仲間といっしょに暮らしていることが、逆に自信を失わせる装置になってしまっている、という気がしてならないのです。

◆オンリーワンの視点で子どもに自信を！

上杉 それでは先生、自信と希望の「自信」に重点をおいて、子どもたちに自信を獲得させていくための周囲のかかわりとか、あるいは教育的配慮ということでお話をさせていただきたいと思います。
園田 相対的評価というものの功罪は確かに大き

いですね。教師は多数の子どもたちを対象にしていますが、子どもはそれぞれ一人一人が自分ですから、やっぱり昨日の自分より今日の自分のほうがずいぶんよくがんばったということであれば、それを子どもは先生から見てほしいわけです。家へ帰っても、そこを保護者に見てほしいわけです。そのときには序列でいうところのナンバーワンではなくて、固有のその子の昨日と今日との違い、ナンバーワンではなくオンリーワン性ですよ、その視点でもって、「すごい」と言ってほしいのです。例えば、昨日叱られたことが今日はみごとにクリアできて子どもが机に向かっていているということであれば、これだけですごいことです。「いやあ。すごい、感心した」というひと言があれば、子どもは自分に対してたいへんな評価をもらったということで、学習に対する意欲にもつながるでしょうし、また明日学校へ来たら先生は自分にどんな声をかけてくれるだろうとワクワクするでしょう。そういう個としてのその子を見る視点というのは、教師は絶対忘れてはならないと思います。同時に全体を見なければならないということももちろんあるわけですが、全体を見ながら、なおかつAちゃんBちゃんを見ていくという両にらみの姿勢です。それは難しいけれど、案外その子を見ていくことを通じて全体が見える場合もあります。全体の森を見ているうちにだんだんと自分で焦点化していった一本の木を見つけてしまうこともあるわけですから。相対的な視点だけでなくオンリーワンの視点ということ、これは常に背中に背負っておきたいと思います。するとAちゃんの輝きが今度はBちゃんの輝きに、というふうに他の子どもを照らす光にもなるのではと思います。その根底では教師の営み、働きかけが、その子どもの自尊感情をはぐくむ、ということにつながっていくと思います。

上杉 これは個々の問題に限らず、子どもの生活の全般を覆っている自信喪失、あるいはそこから発生する意欲の減退とも言えます。もともと子どもに限らず大人もそうですけれども、今の自分を支えているこの自分に対してどれだけ肯定的な感情をもつか、それが生き方を安定させる、あるいは将来に希望をもつすべての源だと思ふんですね。ただ、子どもというのは発展途上、成長途上でありますから、子どもを見つめる教師の目というの

は、できるだけその子を伸ばしてあげるために、どれだけハードルを高くし、そこに向けて努力させるか——好意的に解釈すれば、そういうまなざしの向け方というのは一般的に行われているだろうと思うんですね。しかし結果的にそのことが、子どもの足りない部分を指摘したり、あるいは人為的に力を加えて引っ張り上げようとしたりすることになる。しかし子どもが伸びていくいちばんの原動力というのは、やはり自分に対する自信でしょうね。その足場がきちっとすることによって、先のさまざまなことにチャレンジする意欲が湧いてくるという図式は昔も今もまったく変わらないわけですし、一つのポイントというのは今の自分を肯定的にとらえる、いわゆる自尊感情をきちっと獲得させるということですね。

◆キャリア教育とボランティアで壁を打ち破る

上杉 ではもう一つのキーワードの「希望」ですね。子どもたちが将来を生きるための希望を獲得していくメカニズムのようなもの。どういう環境が自分の将来に対する希望を獲得させていくのかということについて、いかがでしょうか？

園田 自信と希望というのは、表裏一体のものだということに上杉先生はご指摘されましたが、その通りだと思います。今を生きる自信なくして将来への希望というのはなかなか湧いてこないだろうと思います。「自分って見捨てたもんじゃない」、「結構やればできるんだ」という力が日々蓄積されていけば、おのずと将来もさらにこんなことしたいとか、あの人のようになりたいという気持ちも沸々と湧いてくると思います。ところがそこが根元から絶たれている場合は、将来展望、希望などはまったく見えずに、また見ようともせず、目先のことだけに自分の身を泳がせてしまう。そこに快楽を求めてしまうというのが明らかになっています。そういう意味では、まず今を生きる自信を固め、それを明日につなげていく。そのためには、明日って見捨てたもんじゃないんだという具体的な実感をどうもつかということになります。そのときに身近にすてきな大人がいると、自分もこんな人にあんな人になりたい、ということが今、どれぐらい子どもたちに光としてあるのかですね。いわゆるキャリア教育という枠組みの実践活動を通じて、実際に大人と出会う、仕事と出会うこと



上杉賢士先生

を通じて自分の将来の生き方を構想できるようにするということは、互いが希望を培うためのとても重要な教育活動だ、という期待を強くもっているところです。

上杉 子どもたちが自分の将来に向けてどのような希望をもつか。身近に魅力的な大人がいっぱいいる、すごく素朴だけれどもかなり重要な問題ですよ。しかし、残念ながら、将来この人のようになりたいというふうにあこがれを抱かせる大人が少ないというのも一方の事実ではありますね。それからまた、子どもたちが自分の先を見通して、大人になるまでの自分の道のりが見えにくくなっているという実感をもつわけですね。例えば、中学を卒業して高校入試というハードルがある。で、何かよくわからないけれどもその先に大学というところがあって、それを通過して仕事に就く。その間、おそらく子どもの目から見ると、途方もなく道のりが長いんでしょうか、その先に仮に輝く大人がいたとしても、そこにたどりつくための道筋、道のりが子どもたちに見えにくくなっているという印象があるんですね。その大人になるまでの道のりを見通せないことから、とりあえず今楽しいこと、今できることをやるしかないということになる。つまり先を見通して生きるということが、今の子どもたちを取り巻く環境の中では、必ずしもうまくできないようになってきているのではないかという気がしてならないんですね。

かつての子どもたちの目から見ると、周囲にいるいろいろな大人というのは、もしかしたらたいへんな誤解かもしれないけれども、手が届くような身近さを感じたと思うんです。それであの人のようになりたいというあこがれを抱き、日々の生活を一生懸命がんばる。ある意味で非常に単純化

された図式の中で子どもは育っていた気がするのですが、どうも情報がこれだけあふれて、子どもたちがすてきな大人になるための道のりの中でさまざまな壁が何層にも横たわっている。それが子どもたちを将来に向けて生きるための希望を必ずしもたせない。そんな印象をもつのですが。

園田 その壁を、仲間といっしょにこじ開けてみれば、あれ、案外分厚くなかったなあと、むしろやればできるなという、そんな実感できる営みが目の前にあれば、子どもたちは、持ち前の体力でよしやろうということになるのでしょうか、将来展望を描く体力が失せているのでしょうか。僕自身、早く自分が働いて親を楽にさせてあげなくては、という思いがどこかに常にありました。しかし、今の子ども、私の子どもを振り返っても、そんな思いはさらさらないわけですから、余計に将来についての切実感がないのでしょうか。なお、結構ハードルが高い、壁が厚いとなれば、ついついその日暮らして終わって、まあいいや、他の人たちがそうなんだからということになってしまう。

でも例えば職業、職場体験などの具体的な活動を通じて仕事と出会い、働いている大人に出会い、生の声を聞いて学校では得られない感動を子どもたちが学校へもち帰る。そのとき、もち帰った体験、それはすごい体験だ、すごいねという周囲、大人からの評価づけですよね。その評価があるのとないのとは大きく違うと思います。職業体験、職場体験しただけではなくて、それを家に帰れば保護者が、学校では教師が体験の意味づけをすることによって、なお体力を持続させて自分の希望を達成するように、勉強もいやだけど、しんどいけどがんばろうと、身近に引き寄せて考えられます。友達とつき合うことも時には面倒だけれども、これは自分を肥やすため太らすためだという、そういう底力がついてくるのですね。

上杉 まったく先生のご指摘通りですね。踏み込んでみたら、案外それほど強固な壁ではなくて、その先の展望は結構広がるというようなものだろうと思います。これ、学校という空間の中にとどまっている限りはなかなかできないことで、一歩外に出ていって、そこにいる人に直接会って話をしてみる、あるいは何か実際に活動をいっしょにしてみる。そうすることによって見えにくかった壁というのがスッと見通しのよいものになって

いくだろう。例えば子どもたちがボランティアと称して、地域の清掃をする。そこにいろいろなお年寄りがいたり、大人がいたりして、かつてはその人たちとは話もしたことがなく、ただすれ違うだけであつたけれども、同じ活動しようということで集まって、いろいろ話をしてみると、案外いい人が多かった、あるいはいっしょに活動してみたら、けっこうこの活動って気持ちがいいもんだな、子どもたちみんな共通にそういう印象をもつんです。厚そうに見えた壁を、一回スッと踏み越えてみたら、案外見晴らしのいい所に自分が立っていることに気がつく。こういうレポートが実は非常に多いんですね。そう考えますと、やはり頭の中で、ある地点にとどまらずずっと先の見通しをもとうとしても、なかなかもてない。しかし体力をもとにした行動力といえますか、一歩踏み出してみることによって、いろいろな見え方がするわけです。これは子どもたちに希望をもたせるための担任のかかわり方のポイントの一つだと思うのです。残念ながら子どもたちが自力で一歩外に出るということ、これ放っておくとなかなかしないですからね。ボランティアというのはもともと自発的な意思によるものだという規定に縛られて、教師がボランティアに子どもたちの背中を押してやるということを躊躇する空気も一部にはあります。しかし、教師がそっと背中を押して、今まで立ったことのない場所に子どもたちをいったん目を向けさせてみると、子どもたちは、案外気づかなかった周囲の人との関係とか社会との関係に気づいて、そのことが自分の将来展望を見通しのよいものにする——明るいものになるかどうかは別として、見通せるようになる。こういう事例は実はいっぱい報告があるんですね。そうするとやはり、子どもたちの体力がまだまだ十分備わっていると私は信じたいわけですが、その体力が自分の将来に向けて希望を抱く方向へ向かうのか、とりあえず今の暮らしの中で体力を浪費してしまうのか、きわめて重要な分岐点にいるような気がします。そこに大人がどうかかわって、将来に対する希望をもたせるか。かなり重要な役割を担っているのではないか、というのが私の実感なんです。

園田 おっしゃる通りだと思います。今次の学習指導要領改訂の中でも、目的のところに「自己の生き方について考えを深め」とありますが、本当

に分岐点に立って、生き方を今、仲間とともに、そして教師もそこに参入して学び合わなければ時を逸してしまう、というくらいの切実感は感じますね。ボランティア活動も確かに一時、批判もありましたが、子どもたちの背中を押すことを通じ、学びの貴重な機会と子どもたちが遭遇するという意味で、これはもっと、ごく自然に促進されてもいいだろうと思います。そこでまた子どもたちの率直な意見が出し合えるならば、その学校の活動をどんどん修正していけばいいわけですからね。子どもの意見を採り入れながら修正を加えて、また新たなボランティア活動、体験活動というものを拡大していく。そうなれば子どもたち自身にとってもやりがいになるでしょうし、やりがいがまた次の意欲につながっていけば、さらには自分の生涯を決める職業選択や生き方にまで大きく影響を及ぼす。これは重要なことですよね。

ですからもう少し教師のほうが、一つの生き方ということを大テーマにしながら、カリキュラム編成を創造的にしていけば、子どもたちももっと与えられる活動じゃなくて、自分たちがする活動になっていくだろうと思います。そうすれば道德教育と総合学習や他教科と関連づけることにもなり、ある意味で膠着化している全体の教育活動に一つの新しい風を吹きこむことになるでしょうから、それはとても期待したいところですね。

◆正しいキャリア教育でライフデザインを！

園田 そこでキャリア教育の今日的な重要性というものを、道德教育の語る生き方とからめて考えてみたいと思いますが……。

上杉 一般的にはまだまだ「キャリア教育＝職業教育、もしくは進路指導」というとらえ方が払拭されておられません。したがって、例えば重大な進路選択が待っている高校年代でも、いわゆる進学校というのはキャリア教育ノーサンキューと。あるいは職業に就く前にまだまだ時間的余裕がある小学校でもキャリア教育はまだ必要はない、というとらえ方が一般的ですね。

私はそうではなくて、やはり生涯とか経歴とかに注目してとらえる必要があると考えております。そのために一つは、これから先に向けて、自分がどのような生き方のデザインをしていくかということ、自分の将来の中でどのような生き方を自分



がしていきたいのかという設計を子どもたちがするということですね。もちろんそのための原動力は自信と希望ということになりますが、仕事という限定ではなくて、その先の自信と希望をもてるように周りがサポートしていく。これが基本的なキャリア教育の骨格なのだろうと考えております。これまでのカリキュラムというのは、今この年代に必要なことをきっちりと身につけさせるという方向ではたいへんに力を入れて、綿密に編成されてきましたけれども、残念ながらそれがトータルとして先の生きる力にどうつながるかという視点はもてなかったような気がするんですね。その典型的な現れの一つが、例えば人間の感情の総体を伝統的に、知情意という3つに区分して考えた場合に、知の教育は教科で、情の教育は主として道德の授業でとなる。残る「意」、「意思」ですね。この意思形成というのが、実はキャリア教育にかかわる重要な、きわめて重要なテーマなんだろうと思うのですが、残念ながら領域を分割して分担してしまうという仕組みの中で、トータルに知と情と意がうまく重なって、自分の将来に向けて自分の意思で自分の人生を開いていくというその部分の教育の環境というのは、現状では十分ではないだろうと考えております。言い換えると、もう一回これから先の生き方を考え、生き方の教育というふうに考えたときに、自分の将来に向けて人生設計をどのようにしていくのか、そこに必要なエネルギーとしての自分の意思のようなものを、どう子どもたちの中に満ちるような状態を作っていくか——そういう方向で、改めて生き方の教育を考え直してみる必要があるのではないのでしょうか。言い換えると、分担主義、分割主義ではなくて、正に総合化、統合化の方向でしか生き方の教育というのはできないであろうというのが、私なりに今考えている結論の一つなんです。

園田 そういう活動を通じて、やはり漢字を覚えることも、小数の割り算も必要だなという実感をもったとき、子どもは学ぶ内的必然性を得ます

のね。それと今おっしゃった、「意」の問題、私も「意育」という言葉に興味をもっていて、知育偏重といわれていた時代に、一方で「意育」というものがあまりにも忘れられているのではないかと思います。意思決定の意、あるいは意欲の意でもありますよね。生きる意欲と、また自分が自己決定をしてライフデザインをしていくということでは、今まで非常に弱かった部分ですね。そこを子どもたちが実感をもって学ぶ機会が得られれば、本当に勉強する意味、学校へ行く意味、もっと言えば生きる意味も含めて、何か子どもなりの答えを子どもたち自身で導き出してくれそうに思えてなりません。

上杉 そうですね。基本的には、子どもが自分の将来に向けて自分の生き方に対する意欲をもつ、もしくはそれを支える意思をしっかり形成する。これが、生き方の教育においてはきわめて重要なポイントであるということです。

◆感動を共有し、さまざまな感性を出し合う場づくりを！

上杉 そこで具体的に担任はどうかかわればいいのかという問題になりますね。今、子どもたちと向かい合っている先生方に、いくつか方向を示せばと思うのですが……。

園田 道徳の学習材でまず思うのは、子どもたちが感動できるもの、例えばこんな生き方している人がいたのか、こんな厳しい暮らしを強いられた人がいるのか、あるいは生きたいと思っていたのにこのように命を奪われた人がいたのか、など光の部分、陰の部分含めて、感動を仲間と共有できる学習材ですと、おそらく、教師も子どもたちと道徳の授業をしながら鳥肌が立ってくると思いますよね。そういうものをぜひつくろう、そういう時間を共有しよう、という教師の意気込みを期待したいところです。例えば、中国での四川大地震の一週間後ぐらいに『毎日新聞』が第1面に、ある女の子の爪が紫色に変色した手だけを大写にした写真を載せていました。手には赤いボールペン^{がれき}を握り締めて、もう瓦礫に埋もれて命をなくしている状態でしたが、私が担任だったら、絶対それを大きくコピーして、フォトランゲージといいますか、子どもたちと語り合って、この手はいったい何を語っているんだろう、とやったと思いま

す。1枚の写真を通じて今の自分の生き方を振り返ると同時に、奪われた他者の命の分まで生きるにはどうしたらいいのかまで考えるということは、きっと可能ですよね。ですから、道徳の授業は自分たちでつくるんだという意欲を教師がもてば、さまざまに展開できます。そのさまざまな展開というのはきっと子どもも顔を上げて、教師がこれだけ声を変え、表情を変えて語るなら、何かありそうだと向かってくれるでしょうし、また向かえるような子どもと教師の関係というのを日々クラスでつくりたいですね。

上杉 そうですね。学校というのは宿命的に同年代の者が集まるところですが、そこでの道徳の時間というのは基本的には学級のメンバーでいろいろと、あるテーマについて話し合うわけですね。ここに注目をしますと、ある道徳的な問題について、例えば30人の子どもたちが集まって、もちろんそこに教師も参加して、30人いるから、その問題に対するさまざまなとらえ方ができる。例えば手の写真が1枚持ちこまれたときに、ある子はそれについて何か力強さを感じる、ある子はその背後に何か抜き差しならない重大な問題が起きたということを感じる、ある子はそのことが自分たちに何かを訴えようとしていることを感じる。つまりそこに集まっているメンバーが、それぞれに感じたことを出し合って、その1枚の写真の読み取り、読解をしていく。このようにさまざまな感性の持ち主がいて、さまざまな感じ方を表明し合い、それを重ね合わせて自分たちなりのとらえ方、あるいはそれを自分たちの生き方にどう反映させていくかということを生み出す営みが授業であるというのが最近の見方になりましたね。一般的な道徳の時間というのは、道徳の個別指導というのは原則的に有り得なくて、集団を対象として行うということです。なぜみんなでやるのかといえば、そこに集まった人間にはさまざまな感性の持ち主がいて、それをお互いに紹介し合うことによって、お互いにいい刺激になっていく。つまり授業そのものが一つの社会の縮図、構図である。しかもきわめて生産的な場であると。これをきちんと子どもたちにとらえさせていくわけです。30人、40人の子どもたちを一つの教室に抱えてこのような授業をするのは、先生たちに対するハンデとか、非常に大きな負荷というとらえ方を一般的にはします

が、逆にそれだけの子どもたちが集まっていますから、それぞれの感性を大事にしながらみんなで思い切りその感性を道徳的なテーマについてぶつけ合う、ということがうまく教室の中で実現できれば、これはたいへん生産的な装置だというふうに思えるんですね。それぞれの異なった感性の者たちがそこに集うという、この場の条件を最大限に活用して、授業とか教室を生産的な場に置き換えていく。その方向での努力が必要ではないかという考え方が私の中に強くなってきております。

園田 なるほど。いわゆる一斉授業で教師が教え込まねばと思っていると、確かに40人は多すぎます。しかしながら一人一人違った価値観、経験をもった子どもたちが40人もいるのだと思えば、これはもう宝物ですよ。私はへき地校勤務の経験があります。全校児童60名、1クラス、10名足らず。そのときは、10通りの意見しか出ないわけですから、40人クラスを想定すれば、あと30通りの意見は教師が補わなくては多様な意見は出ないと思いました。したがって人数さえ少なくすれば教育は高まるとは思いません。いかに今ある子どもたちの持ち味が伸び伸びと出せるか、そのためには学級で、何でも言える雰囲気、そういう安心できる空間づくりが大切ですね。それと「ひと言いっただけ先生も友達もうなずいてくれた」という自信が生まれる自信空間づくりです。これが日々学級経営の柱として先生と子どもに共有されているか否かというのは大きいですね。せっかくだが経験と発想、感性をもっている、こんなこと言ったら笑われそうじゃないかということであってはこれはもう問題外。もったいないですよ。

上杉 したがって道徳の時間における努力点というふうに限定して考えると、ふだん、学級担任が30人、40人集まっている子どもたちをいったいどのように見なしてきたかということが集約的に現れるわけですね。そこで、ある子が発言し、みんながうなずいてそれを受け入れてくれる。あるいはもしかしたら、これは周りから見ると必ずしも全体の文脈に乗っていないとつひな意見だと思われるかもしれない。でもおそらく、その子にとってはその時間的な流れの中で必然的な発言であっただろう。それを周囲がきちんと文脈の中で一人一人をとらえてあげる。実はこういうやり取りの応酬が、正に授業という営みの基本である、という



らえ方をすることによって、自信を獲得できるのです。そして子どもたちが丹念に丹念に自信を獲得、蓄積していく。そういう風土を教室の中につくっていくこと、これが日々できれば、時間の経過とともに相当な蓄積をもたらすわけで、これは一つの基本的な方向であろうと思います。

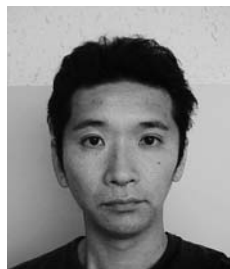
園田 私も教師の仕事、特に担任の仕事は、一つは授業づくり、もう一つは学級、集団づくりだと思います。それを一つの三角形で表しますと、三角形の底辺から頂点への六割ぐらいまでは学級指導、集団指導だと思うんですよ。そこで子どもたちがいい雰囲気をつくり上げていけば安心できるし、お互いが自信を高め合うという学級の風土が生まれます。そのベースの上に教科の学習指導が乗れば、子どもたちが仲間の意見を尊重しながら自分の意見を発言して、またそれが仲間に影響を与えて、相互的な学習ができるだろうと思います。そういう教科指導の上に道徳の1時間が乗っていると思うんです。道徳の時間というのは、内面、あるいは自分の暮らし、履歴がすべて投げ出されたときに、本音の、心が揺れ動くような授業ができるわけですからね。そういう三角形の最頂点に位置するのが道徳の授業ではないかと思います。学習指導要領で道徳の時間を全教育活動を通じてというのは、道徳の授業というのがあらゆる教育活動の頂点に象徴されるようなものであって、すべての教育活動が実質的に実っていなければ、そう簡単に成功するようなものではありません、ということを暗に物語っているのではなからうかと思えてなりません。

上杉 結局は日々の営みの中で、一人一人が大切にされていく、この関係を基盤に、どれだけ自信であるとか、将来に向けての希望を描くことができるかということですね。実は日々の営みが、それを実現していくきわめて重要なことであるという、その基本を確認して、今日の対談は終了したいと思います。ありがとうございました。

(※この対談は平成20年7月20日に行われたものです。)

「分かり合い力」を高める道徳の授業 —— 考えの違いを視覚的にとらえさせる

愛知県名古屋市長神宮寺小学校教諭 内山 幹夫



はじめに

最近、「かっとなったから家族を殺した」「携帯メールで中傷され相手に仕返しをした」等、想像を絶する出来事が新聞やテレビで報道されている。このような事件を目にするたびに、人はなぜこのようなことをしてしまうのだろうかと心を痛める毎日である。自分の思い通りにならなかったり、自分の考えがうまく相手に伝わらなかったりしたときに、心にストレスを感じることはあろう。そこから、人を傷つける行動に走らないようにするには、どうすればよいのであろうか。子どもへの心の教育で、その問題に対処したいと考えた。

「心にストレスを感じる」段階から「人を傷つけてしまう」段階に走ってしまうのは、考えの違いを受け止める「分かり合い力」が不足しているからである。「分かり合い力」とは、考えの違いを受け止めて、分かり合う努力をしていこうとする力である。

その「分かり合い力」を道徳の授業で高めていきたい。それには、その道徳の時間に至るまでに、他の教育活動で、関連する体験の押さえも必要である。そこで、次の段階を用意した。

- (1) 分かる感覚が人と違うことを知る
- (2) 分かる感覚の違いを感じる
- (3) 違いを乗り越える生き方を考える (道徳)

1 実際の経緯

(1) 分かる感覚が人と違うことを知る

国語で『ぼくの世界、きみの世界』(著:西 研／あらすじは□□□□のとおり)をもとにした学習を行った。

人それぞれは、違う考えや感覚をもっている。人と同じだと考えたり、感じたりしてもその人の中に入ることは不可能だから同じであることを証明することができない。

この教材で子どもたちは、人と感覚が同じだと

感じても微妙な違いがあることを知った。

(2) 分かる感覚の違いを感じる

「この文章の言っていることが分かりません。」

前述の国語科の学習が進んできたころ、ある子どもから疑問が出された。他の何人かの子どもたちも首をかしげ、顔をしかめていた。

■国語科を通して

子どもたちは、「あまいと感じていても、実はあまさの程度が違うかもしれない」というフレーズにひっかかっていた。そこで、黒板に0から10までの目盛りをつけた数直線を示し、「砂糖はどのくらいあまいですか」と発問した。そして、順に数値を指し、この程度だと思ったところで挙手をさせた。すると数直線の分布が見事に分かれ、「えっ!」という驚きの声が響き渡った。数直線という視覚的なものを通して、互いの感覚の違いを「感じる」ことができた。

■学級活動を通して

体育の時間にけがをして困っている子に、心配してやさしく声をかけている子どもがいた。その子は、相手の様子を見て、「自分がけがをしたことを思い出し、心配した」と話していた。

その様子を学級活動の時間の話題にした。すると、相手の様子と自分の体験を結びつけて相手の痛みや喜びを考えているという意見が相次いだ。子どもたちは、相手の表情から感覚をより深く「感じ」ようとしているように思った。

■道徳の時間に向けて

人それぞれ考えの違いがあるということは、子どもたちは周知していた。しかし、同じ言葉でも感覚が違うということは子どもたちにとって新しいことであった。そのようなとき、子どもから「感覚が違うから分かり合えないのか」という疑問が出された。これを受け、道徳の時間で、「人と人が分かり合うにはどうすればよいか」というテーマで考えることにした。

(3) 違いを乗り越える生き方を考える (道徳)
(第6学年/男子15名・女子16名)

1. 主題名 「人と人が分かり合うには」

内容項目 2-(4) 謙虚・寛容

2. 資料名 「すれちがい」

(作: 谷口清子/文部省『道徳教育推進指導資料4』より)

〈資料前半部分のあらすじ〉

よし子とえり子は、いっしょにピアノ教室に行くことを約束した。待ち合わせ場所に最初に行ったよし子は、えり子を待った。30分近く待ったが、えり子は来なかった。よし子はひどく腹を立て、遅れて来たえり子が遅れた理由を言い始めたら、それをさえぎった。

〈資料後半部分のあらすじ〉

しかし、えり子は家庭の事情で遅れたのだった。遅れた事情を聞こうとしないよし子に、えり子は腹を立てていた。

3. 本時の目標

相手との意見のくい違いが生まれても、分かり合ってよりよく生きる気持ちを高める。

4. 展 開

(○主な発問 ・児童の反応 *指導上の配慮)

① 分かり合えないときの状況を振り返る。

○けんかしてしまうのは、どんなときですか。

- ・悪口を言われたとき
- ・話を聞いてくれないとき
- ・秘密を言われてしまったとき
- ・自分のことを分かってもらえないとき

*けんかしてしまうときのことを思い出させた後、資料から何を考えるかをはっきりさせる。

② 資料を読み、なぜ分かり合えないのかを考える。

○よし子は、何に怒っているのでしょうか。(前半)

- ・待っていたけれど、来なかったから怒っている。
- ・えり子が、言い訳をしようとしたから怒っている。

○えり子は、何に怒っているのでしょうか。(後半)

- ・勝手に待ち合わせ時間を決めたから怒っている。
- ・自分の話をまったく聞いてくれようとしなから怒っている。

*状況を把握しやすいように資料を前半部分と後半部分に分けて読むようにする。

*よし子が自分の都合しか考えていないことに気づかせる。

③ すれちがいを埋めるための気持ちを考える。

○二人はどのくらい怒っているのかを考えて、二人の顔の表情をプリントにかきましょう。

- ・目つきや口元に気をつけてかこう。
- ・どちらのほうより怒っているんだろう。難しいな。

*二人の主人公が怒っている様子を想像して、顔の表情の絵をかかせる。

*表情をかいた後に、なぜそのような絵にしたのかという理由も記述させるようにする。

*顔の表情を見せ合いながら、二人組みで話し合いをさせる。

○二人の心の溝を埋めるためには、どんな気持ちが必要でしょう。

- ・相手のことを考える気持ち
- ・思いやり
- ・自分が悪かったと謝る気持ち
- ・相手の話をしっかり聞こうとする気持ち
- ・自分のことを反省する気持ち

*数直線を利用して、二人がどれくらい怒っているのかを数値で表すようにする。

*板書を利用して二人の間に大きく溝ができていたことをつかませ、子どもたちの何とかしたいという気持ちを揺さぶる。

④ よりよい生き方を考える。

○もっとも大切なことは何でしょう。

- ・相手ばかり責めてはいけいないな。
- ・自分のことを反省することが大切な。
- *4人グループで話し合いをさせる。

*心の溝を埋めるために必要だと感じた気持ちから、「相手のこと」「自分が悪い」「自分のことを反省」などのキーワードを拾う。

*キーワードを使って、「謙虚・寛容」といった意味を気づかせるようにする。

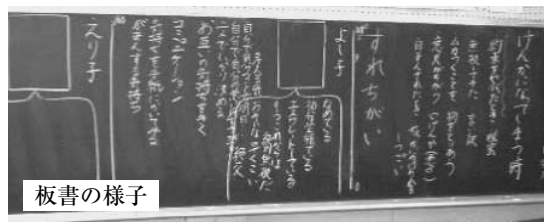
⑤ 主人公に手紙を書き、聞き合う。

○溝ができた主人公に手紙を書きましょう。

- ・相手のことを聞いてあげないといけいないな。
- ・自分の気持ちを抑えることも必要な。

*学習プリントに手紙を書かせる。

*ねらいに迫ることができるようなメッセージを抽出して、教師が読み上げる。個人名は言わないようにする。



板書の様子

2 道徳の授業の成果と課題

(1) 実践の成果

国語科や学級活動との関連から授業の構想を組み立て、視覚的（数直線・表情絵）に感覚をとらえさせた。学習問題を子どもの意識をもとに作ったため、道徳の時間においても子どもたち自身が主体的に考えていった。

道徳の時間後、子どもたちに感想を書いてもらった。次はその例である。

今回の主人公たちは、自分たちの思いこみのひどさからけんかしてしまっている。もともとは友達だったのだから、いつかは仲直りできると思うけれど、お互いに相手のことを分かってもらうことが大切だと思った。

友達に悪いことをしてしまいました。相手も私にいやなことを言ってきたので、ついつい仕返ししたいにしてみました。でも自分も悪いことをしてしまっているから、相手に謝っていききたい。

子どもたちの感想から分かるように、授業を通して、相手のことを分かってもらう気持ちが高まってきていることが分かる。今回の実践では、「分かり合い力」を高めるために視覚的な手だてを取り入れていった。目に見えない気持ちを視覚で分かるように表現することによって、分かりやすいという子どもの感想が多かった。また、実生活でも、相手の気持ちを何か別のもので表現し理解しようとする姿も見られるようになってきた。

(2) 実践後の課題

まだ、子どもたちは、自分本位な視点にとどまっているところがあり、相手の視点に立つ気持ちが不足しているところも見られる。また、子どもたちどうしのトラブルは依然として絶えない。

学校は、集団で生活を共にする場である。トラブルは起こる。その機会を、「分かり合い力」を身につけていく機会としたい。それには、道徳の時間を、今まで以上に、子どもにとって意味のある

ものにしていく必要がある。そこで、前述の授業に検討を加えることにした。

3 道徳の実践をよりよくするために

以上の実践を通して、次の(1)～(3)の内容項目と資料分析の大切さ、さらには導入の進め方の大切さに改めて気づいた。また、今回は資料を分割したが、一括して扱ったほうがよいことも感じた。

これらのことは今後の実践に生かしていきたいと考えている。

(1) 内容項目「謙虚・寛容」についての検討

内容項目「謙虚・寛容」についての教師側の意識が浅かった。謙虚は、強がりや意地・エゴ・プライドといった我執を捨てることができるものである。謙虚な心をもつことによって、人に認めてもらえ、自分の心に余裕をもつことができるのである。こういった内容項目への掘り下げがされていれば、子どもの反応に対する教師の投げかけもよいものになっていくと感じた。

(2) 資料のさらなる分析

① どうして二人は、ピアノ教室にいっしょに行こうとしたのか。

→それは、仲がいいからである。苦しいピアノ教室も二人だと楽しいのである。楽しいからこそ、わがままが出て、すれちがいが起きてしまうことに目を向けさせたい。

② えり子は言い訳をしていない。

→言い訳と思い込んでいるのは、よし子である。その、よし子の至らなさを浮き彫りにすることで、謙虚の意味がわかるのではないか。

③ ギャップを生んだものは何か。

→新たに導入で考えた図をもとに、「自分のことばかり考えている」「自分の都合優先」「感謝がない」といったことに気づかせたい。

(3) 導入の改善

導入の改善が必要だと感じた。例えば、以下のように「すれちがいて、次の①②③④のどれですか」と問うてみるのが考えられる。



子どもたちが答えた後、「なぜそう考えたのですか。」と問う。そうすることによって、子どもたちは「何を考えるか」がはっきりしてくる感じた。

大人に連なる「心の教育」

八洲学園大学教授 渡邊 達生



道徳教育が始まって40数年が経った。今、社会を構成する大多数の大人は、道徳教育を受けた人たちである。ところが、社会では、凶悪な事件が絶えない。いや、増加の傾向にあるのである。心の教育の成果はどこにあるのであろうか。

子どもであるときに、学校で豊かな心を養ったとしても、大人になったときにそれが表れてこなければ教育の成果はないのである。

内山教諭は、凶悪な事件が繰り返されるのは、心が育っていないからであるとして、その解決には、子どものときの道徳教育で「分かり合い力」（考えの違いを受け止めて、分かり合う努力をしていこうとする力）を養うことが必要であると考えた。さらには、それを構成する道徳内容として、「謙虚・寛容」をあげている。

大人が引き起こす凶悪事件の根源を断つために、小学校での心の教育のよりよいあり方を求めているという姿勢に、教師としてのすばらしい使命感をもっていることを感じる。しかも、その道徳の時間に至るまでに、「分かる感覚が人と違うことを知る」「分かる感覚の違いを感じる」という体験の場を設定しているが、その体験の場は特別に仕立てたものではない。学校で繰り返されている教育活動の場を生かしているのである。その、日常性がよい。心の教育は、特別なものであると、それだけのものではなくなる。日常性があることによって、大人に連なるものとなるであろう。

さて、その道徳の授業では、「すれちがい」という資料を用いている。資料の内容を分析し、登場人物の「よし子」「えり子」の感情的な対立をもとに、それぞれに、「分かり合い力」を備えさせたいとする子どもたちの気持ちを呼び起こそうとしているのである。子どもたちは、この二人のけんかを見て、自分のことをふり返っている。そして、相手を分かろうとすることの大切さを感じたり、友達にってしまった過ぎた行為を反省したり

している。それなりに、効果があったようである。

しかし、内山教諭は、「子どもたちどうしのトラブルは依然として絶えない。」「道徳の時間を、今まで以上に、子どもにとって意味のあるものにしていく必要がある。」として、道徳の授業に検討を加えている。ここが、特筆すべきところであり、またその改善の視点が優れている。謙虚ということを深くとらえ直しているのである。それまでは「相手のことを考える気持ち」としていたものを、「謙虚は、強がりや意地・エゴ・プライドといった我執を捨てることができるものである。謙虚な心をもつことによって、人に認めてもらえ、自分の心に余裕をもつことができるのである。こういった内容項目への掘り下げがされていれば、子どもの反応に対する教師の投げかけもよいものになっていく」としている。

また、「楽しいからこそ、わがままが出て、すれちがい起きてしまう」という考えに至っている。これも、意味の深いところを探り当てている。

「これはいけないこと」「だからこのようにしましょう」では、通り一遍のことであって心の中に宿ることはあまり期待できない。「なるほど、それは、そういうことだったのか」という納得があって、心の中に深く納まっていくのである。それによって、生涯にわたる、生きる支えとなる。そのような観点に立つとき、内山教諭が、道徳の内容をとらえ直したことに、大きな意義を感じる。

さらには、導入の扱いの大切さにも言及している。「すれちがい」とはどういうことか、いくつかの図で示し、それを選択させ、なぜそう考えたのかを問うのである。そうすることによって、「自分のことばかり考えている」「自分の都合優先」「感謝がない」といったことに気づかせるという。ここに、子どもが、よりよい生き方を自覚していく過程がある。これが心の教育である。

いい研究成果である。

授業を変える スパイス II



福岡県北九州市立沼小学校校長 立川 修司

1 スパイスの使い時とは

新しい『小学校学習指導要領解説 道徳編』の第5章「道徳の時間の指導」に、道徳の時間の特質が次のように書かれています。

『道徳の時間は、児童一人一人が、

- ① 一定の道徳的価値の含まれるねらいとのかかわりにおいて自己を見つめ、
- ② 道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを発達の段階に即して深め、
- ③ 内面的資質としての道徳的実践力を主体的に身に付けていく

時間である。』（便宜上、箇条書きに書き直しています。）

このように3つに分けてみると、1時間の授業展開の流れ（指導過程）も見えてきます。

ほんとうの料理に使うスパイスはその料理を引き立てるための脇役ですが、料理の過程で入れ時をまちがうと料理全体の味を壊してしまいます。道徳授業のスパイスも同様に入れ時を考えて使わなくてはなりません。どの段階で何のために入れるスパイスなのかといった吟味は常に必要です。道徳授業のスパイスも、使う時や使い方をまちがえると、授業をつまらなくしてしまいます。⇒スパイスは、使い時や適量（回数）を考えて使いましょう。

2 ◆◆スパイス その3◆◆（1・2は前号参照） （手紙を書く活動）

手紙を書くという活動は、一般的によく見られる方法です。中でも授業の終末段階で取り入れられていることが多くあります。ここでは、低学年・中学年・高学年のそれぞれに使える手紙を書く活動をご紹介します。

■登場人物に宛てて……低学年

読み物資料の場合、通常、登場人物の心情を考

えさせたり共感させたりすることによって道徳的心情に迫ることが多いものです。しかし、登場人物の心情のままでは、終末の『内面的資質としての道徳的実践力を主体的に身に付けていく』段階につながりにくいことになってしまいます。そこで、登場人物の行動や心情をふまえて、さらに、今後どうしたらよいのかを考させるため、児童に第三者の視点をもたせる方法があります。

資料名……「かぼちゃの つる」

献立名……低学年の「節度」

使い時……終末の段階

スパイス……新しい登場人物「お日様にな
って、かぼちゃさんに手紙を書いてあげ
ましょう。」

「かぼちゃの つる」の資料に、かぼちゃがわがままをする一部始終を空の上から見ていたお日様を新たに登場させます。そして、児童にお日様にならせることで、かぼちゃはこれからどうすればよいのかを、児童は自分と重ね合わせながら、無理なく考えることができます。

発問も、かぼちゃに何を教えるのか、どんなことを教えるのかなどの詳しい説明はなくても、児童は自然にかぼちゃさんにこうしたらいいよと教えることができます。

⇒低学年は、手紙を書いて教えてあげるという活動で自分も成長することができます。

■実在の人に宛てて……中学年

低学年のときには資料中の登場人物と一体化して考えたり共感したりしていた児童も、中学年となると資料中の登場人物とは少し距離を置いて考えることができるようになってきます。実在しない資料中の登場人物に宛てて手紙を書く活動にもとまどいが出てきます。

そこで、実在の人物に宛てて手紙を書かせてみると、相手意識の高まりも加わって意欲的な活動となります。

献立名……「尊敬・感謝」

スパイス……日ごろ世話になっている人や、
日々の生活を支えているさまざまな人々
へ実際に手紙を書く。

道徳の時間の指導においても多様な学習指導の工夫が求められています。また、地域社会との連携や地域の人々の授業参加も重要な要素の一つとなっています。

他教科との連携や多時間扱いの実践になると思いますが、尊敬と感謝の気持ちを実際の手紙に書き相手に伝えることで、より確かなものにすることができます。相手によっては、電子メールでもよいでしょう。

ただし、一人の人に集中しないようにとか、事前に相手の了解を得ておくなどの指導者としての配慮は必要です。

また、場合によってはお返事をいただけることもあり、それらの交流を通して、児童は人の生き方と自分の生き方を重ね合わせて考えを深めることも期待できます。

⇒切手をはってポストに入れる。送信ボタンをクリックする。そんな体験が子どもの心をワクワクさせます。

■自分への手紙……高学年

高学年ともなると、一般的に、抽象的、論理的に思考する力が高まってきます。

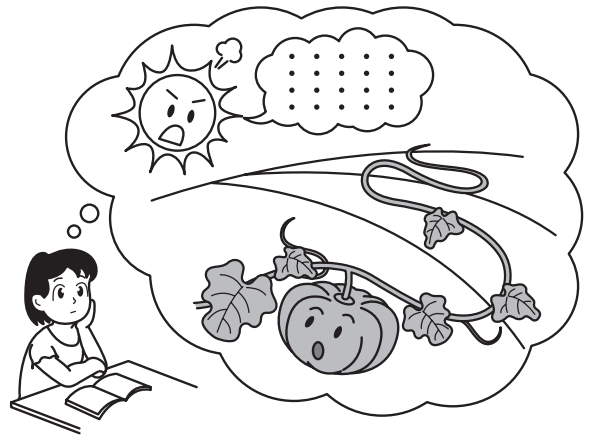
例えば、

- ・他律的態度から自律的態度へ。
- ・主観的な見方から客観的な見方へ。
- ・結果論と併せて動機論も考慮できる。
- ・一面的見方から多面的見方へ。

と、その発達段階が進んでいくと考えられています。

中でも、高学年の児童は、内省する力が急に高まってくる時期だとも思います。

ところで、週に1時間しかない道徳の時間を再び振り返ることができ、繰り返し考えるためにも記録として「道徳ノート」を使われている先生は多いのではないのでしょうか。



道徳の時間は話し合い活動が中心となることが多いのですが、書く活動も大切であり、それらを残しておくための「道徳ノート」や「道徳ファイル」は学習の足跡として重要となります。

そこで、内省する力の高まる時期の児童に、道徳的価値をより強く自分とのかかわりでとらえることができるようにするためと、児童が自分の成長の足跡を振り返ることができるようにする記録として、「自分への手紙」を書く活動を紹介します。

使い時……道徳の時間の毎時間

スパイス……「自分への手紙」

このスパイスは、その名の通り、児童が自分へ宛てて手紙を書く活動です。

初めは自分で自分に手紙を書くことにとまどいもありますが、回を重ねるにしたがって、児童は自分自身と対話をすることに慣れ、自己の生き方についての考えを深めていくことができるようになります。

このスパイスには次の留意点があります。

- ① 年間を通して継続して取り組み、「道徳ノート」に代わる記録として残していく。
- ② 道徳の時間の終末では書く時間の確保が難しいので課外の時間も確保する。
- ③ 「自分への手紙」を読むのは担任だけとし、その内容は他言しないと約束する。
- ④ 「自分への手紙」は担任との交流でもあるので、必ずコメントを書いて返す。

⇒1年後にはすてきな宝物になります。

道徳の時間を変える②

～ウェビングで

多角的に考える力を育てる

千葉大学准教授 土田 雄一



1 「ウェビング」(マッピング)で多角的に考える力を育てる

従来の指導方法であれば、主人公の心の悩みや葛藤を考える場面では、「主人公の〇〇はどんなことを考えていたでしょう」などと発問し、ワークシートの吹き出しに、複雑な思いを文章で書いていた。これからも大切にすべき基本型である。

ここでは、「ウェビング」を用いて、心の葛藤を図で表す方法を提案したい。

2 「ウェビング」(マッピング)とは

「ウェビング」(マッピング)とは、思ったこと・考えたことを短い言葉で表し、さらにその言葉からイメージする言葉・考えを発展させたり、つないだりするもの。思いを図(「心の地図」)で表現するもの。(土田、2007)

「ウェビング」は、総合的な学習の時間や社会科などで、一人ひとりがテーマからイメージを広げたり、やりたいことを絞ったりする方法として活用されている。呼び方こそ違え、図工・国語での作品イメージマップ、理科などで活用されるコンセプトマップなど「図で表す手法」(マッピング)は、さまざまな教科で活用されている手法である。

実際に授業で活用し、子どもたちも図で表すことに抵抗が少なくなっているのなら、道徳の時間にもぜひ活用したい手法である。

3 実際の授業でどう活用するか

～「やくそく」から～

習志野市立大久保東小学校の松田憲子教諭が4年生を対象に実施した実際の授業をもとに説明する。資料「やくそく」は次の通り。(出典：『小学校「道徳シート」とエンカウンターで進める道徳・中学年』明治図書)

よしえとまさこは、よくいっしょに遊びます。今日も学校から帰ったら、いっしょに遊ぶ約束をしています。帰りがけに、ゆみがよしえのところに来て言いました。

「今日、遊べる？」よしえは「うん、いいよ。まさこちゃんもいっしょだよ」と答えました。そして帰り道、よしえとまさこがいっしょに帰るとき、よしえはまさこに「今日は、ゆみちゃんもいっしょだよ」と言いました。

それを聞くと、まさこは嫌な顔をしました。「どうしたの？」とよしえが聞くと、まさこは、「だって、私、ゆみちゃんとよくけんかになっちゃうんだもん。だから、遊びたくないなあ」と言いました。よしえは困ってしまいました。

登場人物の絵をはりながら、資料の3人の関係を板書したあと、「よしえさんが考えたことをワークシートにウェビングで表してみましょう」と発問した。

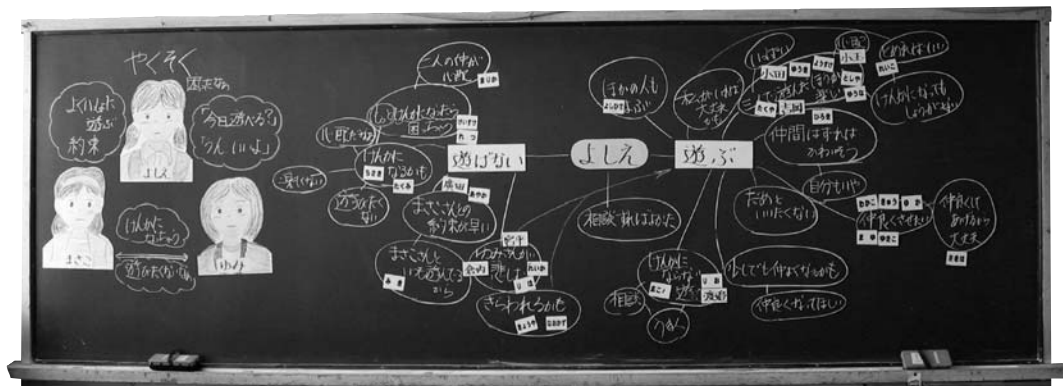
子どもたちの発表をもとに、教師は板書でウェビングを広げていく。

そして、自分ならどうするかを考えさせ、ネームプレートを置く。選んだ理由について意図的に指名をし、それぞれの理由の違いについて気づかせる。

全体として、相手のことをさまざまな角度から考えることの大切さに気づかせる授業である。

子どもたちは「遊ぶ・遊ばないの両方ウェビングしてみて、どんな気持ちになるかわかった」「考えが全然違うことに気づいた」などのほか、友達を選んだ理由を聞くことで選択を変えたり、よりよいものに変えたりする子も出てきた。

しかし、より価値を意識させるためには、最後に価値に切り込む「発問を工夫する」などの手立てが必要であることもわかった。



4 「ウェビング」活用の長所と短所

(1) 長所

- ・短い言葉なので、文章にするより、考えを表現しやすい。
- ・さまざまな方面に考えや思いを広げたり、深めたりできる。
- ・別の関連する考えをつなぐことができる。
- ・あとで振り返ったときに自分が考えたプロセスがわかりやすい。
- ・おとなしい子、あまり発言しない子にも取り組みやすい。
- ・友達の考えや発表からさらに考えを発展させたり、深めたりすることができる。
- ・意思決定の資料となる。
- ・「自己評価」の1つの資料となる。
- ・実生活で応用できる。

(2) 短所

- ・時間がかかる。(個人→全体→個人)
- ・方法に慣れる必要がある。
- ・葛藤型の資料に向くが、活用できる資料とそうでないものがある。
- ・「個人差」が出やすい。
- ・深めさせるための発問を用意しておく必要がある。

5 資料について

相手の立場や自分の思い、周りの人たちの気持ちなど、「いろいろな角度から考えさせたい資料」や「それぞれに言い分があり、ほぼ同等の価値をもつ葛藤資料」がよい。どちらの考えも「一理ある」から判断・意思決定しにくい。その葛藤を図で表すのである。

結論がわからない資料もよいだろう。すなわち、1つの方向のみに考えが及ぶのではなく、さまざまな視点から考えられる資料がよいのである。

6 授業の基本的構成について

- ①資料を提示する。
- ②自分の考えをウェビングで表す。
- ③ウェビングした中から第一次判断をする(○印をするとよい)。
- ④全体で話し合い、教師が板書上にウェビングで指導の発表を整理する。
※板書は、考えの価値(自分のため、友達のため、みんなのためなど)によって意図的・構造的に行う。
- ⑤ウェビング全体を見渡し、自分だけでは気づかなかった考えやよいと思った意見を話し合う。
- ⑥二次判断(☆印をするとよい)を行い、その行動をとったあとの自分の気持ちを考えさせる。
決定した判断を板書上のウェビングに自分のマグネットをはる。
- ⑦お互いの意見について話し合い、授業を振り返る。

7 実生活でも応用できる

現実の社会において、道徳的判断を迫られることは少なくない。「友達と遊ぶか、母親との約束か」など、もし、どちらかに行った場合(遊んだときと母親の約束)を考え、どちらがよいか判断するだろう。つまり、両方の行為を考え、その後の影響や自分の思いなどを天秤にかけて、総合的に判断しているのだ。頭の中だけの考えを、図で表し、整理しやすくしたものである。

道徳の時間に限らず、混乱したり、悩んだりしたときに活用できる手法である。

同時に、自分の考えのプロセスが残っているので、振り返りのときの「自己評価」にも活用できる。自分の1時間での考えの変化がよくわかるだろう。

「時間がかかる」「適切な資料が少ない」などの課題はある。それらをクリアして子どもたちの「生き方を見つめ直す」サポートをしたいものである。

道徳項目の核心に迫る授業

東京都大田区立相生小学校教諭 鈴木 浩文



はじめに

子どもたちは、例えば「規則を破ってはいけない」ことを知っているが、目先のことや何かに気をとられて、その道徳的価値から離れてしまうのではないか。また例えば「思いやりは大切」とわかっているけど、その「思いやり」とは何かを自分のものとしてつかんでいないのではないか。私はこのような思いから、道徳の授業では資料から道徳項目を抽出するのではなく、その道徳項目について考えを深めたり、視点を変えて考えたりしながら、資料を通してその道徳項目の本質、核心に迫る、触れること、これこそが道徳の授業なのではないかと考えています。

子どもとともに考える授業

そこで、子どもたちに教える授業ではなく、子どもたちとともに考える授業を作っていけたらと考えました。そのために私は、以下の三つのことについて試みました。

一つ目は、本時に扱うテーマについて導入で考えさせました。そのことによってテーマに迫る視点が見えてきます。そして二つ目に、資料を読む視点を与えました。なんとなく読ませるのではなく、テーマへの視点をもったことで、本時に考えたい道徳的価値について、資料を読んだ後に、自然に考えていくことができると思いました。三つ目は、発問を絞るということです。このことはどの授業にもいえることで、あらためて言うことでもないかもしれませんが、いちばん考えさせたいポイントに迫ることができるよう、発問を考えました。

子どもたちの意識が、教師が考えさせていきたい方向と違う方を向いていては、自然な流れはできませんし、子どもたち自身、授業の流れに違和感を受けることでしょう。それに何より教師の発問を子どもたちが理解することができないと思い

ます。先述した発問で、授業のテーマに一気に迫り、時間をかけて子どもたちと考えていくためには、発問までの流れが大切だと思います。子どもたちとともに考える授業とは、教師が意図するいちばんのポイントに、子どもたちが自然と考えていく流れを作ることが大切だと思います。

◆実践◆

「一日十分」という資料を使っている授業です。

T：今までみんなは、どんなことをがんばったことがありますか？

C：マラソン。がまん。リレー。スイミング。バレーボール。英語。野球。ゲーム。

T：どうしてがんばったのかな？

C：きたえたいから。相手をこえたい。試合にしたい。勝ちたい。級があがりたい。メッセージを送りたい。ほめられたい。

T：みんなは目標があって、そのためにがんばったんだね。今日は、「一日十分」というお話を読んでいきます。一日十分、何かを続けるってどう？ できそう？

C：うん、簡単。

T：そう？ それでは本に出てくるみどりさんは、どんなことをがんばったのかな、と考えながら読んでください。

(資料を読む)

T：みどりさんは何をがんばっていたかな。

C：字が上手になること。みんなみたいに上手になること。字が汚いから、みんなみたいに上手に書きたいと思った。

T：それでどうしたのかな？

C：字を書く練習をした。

T：みんなと同じように、目標をもってがんばったんだね。それでどうなったの。

C：字が上手になった。

T：がんばって字が上手になったんだ。簡単だね。がんばったら字が書けるようになったんだね。

C：違う！ やめようと思ったこともあったんだよ。
T：なんで？
C：字が上手にならないから。
T：一日十分、続けることって簡単なんじゃない？
C：むずかしい……。
T：でも、なんで続けることができたのかな。
C：字が上手になりたかったから。
C：自分で決めたことだから。
C：自覚。
T：がんばることってどうかな？
C：むずかしい。
C：でも自分で決めたことはがんばれる。
T：こんなみどりさんに、みんなはなんて言葉をかけますか？
C：字が上手になったんだね。
C：これからがんばってね。
C：一日十分、やってきたんだね。
T：がんばってきたことを認めてあげるんだね。
みどりさんはがんばって、字が書けるようになったんだね。
C：違う、がんばることができるようになった。
T：どういうこと？
C：字だけじゃなくて、他のこともがんばれるようになった。
C：字が上手になってうれしかったから、もっと上手になろうって思った。
T：もっとがんばろうという気が出てきたの。ここがゴールじゃないの。
C：うん、他にもいろんなことをがんばろうと思う。
C：これからまたいろんなことにがんばろうと思う。
T：すごいね、みどりさんは字が上手になるために練習して字が上手になっただけではなくて、がんばる力を身につけたんだ。そしてそれは、またいろんなことにがんばることができるパワーを身につけることになったんだね。こういう力はみどりさんしかないのかな？
C：ちがう～。
T：Yさんには？
C：ある～。
T：Sくんには？
C：ある～。
C：みんなもってるんだよ！

T：そうかあ、みんなもっているんだ。それじゃあもう、すぐに夏休みに入りますが、みんなも夏休みの間、一日十分、何かががんばれるといいですね。

◆成 果◆

がんばることが、ただの目標達成としての「できるいいこと」ということで終わらずに、「これからのことや他のこともがんばれるようになることなんだ」という価値にまで深められたことは、「がんばること」に絞って時間をつかって話し合うことができたからだと思います。以前の授業ではあらすじなどを振り返ったり、登場人物の気持ちを考えながら展開していましたが、そうすると、いちばん話し合いたいところで時間をかけられずに終わってしまうことがほとんどでした。導入でがんばるということに目を向けておいたことで、資料を読んだ後に、子どもたちが「がんばること」について意識を向けてねらいを絞って話を深めていくことができたと思います。

その後、夏休みの宿題の表紙に、夏休みの目標を書く時間をとりました。『一日十分』できたらいいね」と言う、子どもたちは意欲的に夏休みの目標を考えることができていました。

◆課 題◆

子どもたちは、「自分が決めたことだからがんばれる」ということを一つの価値として出してきましたが、このことについてあまり触れずに授業を進めてしまいました。子どもとともに考える授業とはいえ、私が考えていた方向に子どもたちの思考を引っ張ってしまったと思います。

もっと子どもたちの思考に寄り添って授業を進めていくためには、子どもたちにもっと譲ってよいことがあったと思います。例えば、板書を子どもたちに参加させるなどです。子どもたちに主体的に考えさせることで、テーマについて焦点化して考えさせることができるのではないかと思います。

そして自分の立ち位置です。子どもとともに考えるのですから、板書を背にして授業を進めていくのではなく、子どもたちの席に座って、周囲の子に「わかった？」などと聞いたり、「う～ん、わからないなあ～」などとつぶやいてみせたりすることで、子どもたちがよりいっそう自分たちの問題として考え、意見を発表することができたのではないかと思います。



不機嫌なリゾート生活

東京都立梅ヶ丘病院リハビリテーション科医長 鈴村 俊介



長年児童精神科の臨床に携わっているが、この10年ほどで小学校5、6年生から中学生に見られる不登校がずいぶん様変わりしたという印象をもっている。以前との大きな違いは、不登校児にあまり緊張が見られなくなったことである。言い換えれば、自分が学校に行けないことに困っていない子どもが多い。不登校という事態は彼らにとってさほど深刻な問題となっていないように見える。

不登校のきっかけはささいなことが多い。もちろん深刻なはじめのために不登校に陥る例もあるが、大多数はちょっとしたことで学校に行かなくなる。何かがあったようにいかないと失敗に耐えられず、いわば「舞台から降りて」、ずっと自分の家に撤退してしまう。

こうした子どもたちと話していると、「人前で失敗したくない」「笑われたくない」「人に合わせるのに疲れた」というせりふがよく出てくる。自己評価が極端に低い子が多く、「自分は自分、人は人」と思えない。自分を評価する物差しが自分の中になく、自分の価値は常に他人にどう評価されるかで決まってしまう。そんな生活を続けていれば疲れては、「学校が嫌だ」となっても不思議はない。自分の感じたことや考えたことを自由に表現し、相手に受け止めてもらえなければ、何のために人とつき合うのか分からない。

さて、こうして自宅に撤退した子どもたちには快適な生活が待っている。考えてみると、20年前、30年前の不登校児と比べると、自宅での暇つぶしはきわめてぜいたくに提供されている。テレビを見る、ゲーム機で遊ぶ、常時接続のインターネットを楽しむ、すべて本人の負担はゼロである。近所でDVDを借りてくれば、ほんの数百円の出費で映画を観賞することが可能である。勉強もしなくてすみ、三食昼寝付きとなればほとんどリゾートホテルに滞在するようなものだ。こうなると「家にいるのが楽だ」という気持ちはふくれあがる。

親も「学校には行くものだ」と子どもの尻を叩く人が減っている。もちろん登校刺激がかえって逆効果になるケースもあるのだが、親によっては「そんなに嫌なら行かなくていいよ」と本人の不登校を応援してしまったりする。親自身も子どもに正面から向き合っていっしょに問題を解決することから逃げてしまうケースも多い。子どもは学校から逃げ、親は子どもとの対決から逃げるため、自宅への引きこもりが続いてしまう。

子どもたちは、自宅にひきこもることができて心から満足というわけでもない。生活が安楽なわりには不機嫌になることが多い。ときどきいらだって壁をたたいたり蹴ったりする子もいる。だからといって学校に行こうとはしない。私はこれを「すり鉢の底状態」と呼んでいる。子どもはいわばすり鉢の底に立っているようなもので、いちばん下にいるのでおもしろくない。だが、そこから脱出しようと思っても、歩き出せば必ず登り坂が待っている。一人で登るのは辛いので歩くのをやめてしまう。その後はすり鉢の底で再び「不機嫌なリゾート生活」に陥ってしまう。

こうした不登校に対応するためには、「学校が嫌だ」という気持ちの底にある、彼らの低い自己評価という問題にいていねいにつき合い、「家にいるのが楽だ」という気持ちを助長する環境要因を一つずつ潰し、本人に自分を取り巻くありのままの現実を見てもらうという、多岐にわたる作業が必要となる。担任の先生だけががんばって成果の出る問題でないのは明らかで、学校と家庭との密接な共同作業が求められる。「鉄は熱いうちに打て」というが不登校対策も同様で、小学校全校へのスクールカウンセラー配置を一刻も早く実現してもらいたいものだ。

すずむら・しゅんすけ 1980年、東京大学文学部社会学科卒業後、群馬大学医学部に入学。1986年、同大学卒業後、東京医科歯科大学医学部附属病院精神神経科、大宮厚生病院勤務を経て、1990年から現職へ。

心に残るひとこと

筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行



「素直」という言葉がある。ふだんみなさんはこの言葉をどういう意味で使っておられるだろうか。ともすると、あまり深く考えることもなく、「正直と同じこと」くらいのとらえでとどまりがちである。

私の担任する3年生の子どもたちと「素直になる」ということについて道德の授業で考えたことがある。そのとき、私は初めて「ああ、素直ってそういうことか」と実感し、子どもたちから教えられた気持ちになったことがあった。もちろん、素直ということについて、授業する前から自分なりに考えをもっていた。しかし、子どもたちは私の思惑を上回った。それはどういうことか、振り返りながら考察を加えてみたい。

まず、子どもたちはたいへん素直にものごとを考え、友達の意見を受け入れ、自分の考えを修正していった。そして最終的に、素直になるということは、

自分のよくありたいという心に正直

という結論に達した。そして、

正直にすると本当の自分になれる。

というキーワードを見つけ出した。それだけでなく、学習したことを実践を通してみごとに証明しはじめたのである。

「正直」についてみんなで考えました。そして私は「正直」のことを知りました。その「正直」を、家に帰って使いました。

これはSさんの「道德ノート」の記述である。Sさんは何をしたかという、父の日の前に、お父さんへのプレゼントの中身を正直に教えてあげてしまったのである。もちろん、当日までないし

よにしておいて、驚かせるというプランもあった。しかし、Sさんはそれよりも自分が知った正直のよさを使って、お父さんに「大好きだよ」というメッセージを早く伝えたくなったのであろう。そういう素直さ、みなさんはどう思われるだろうか。私は大好きである。もちろん、Sさんのお父さんもととても喜んでくれたそうである。

別の話。本校では、3年生から3泊4日の宿泊合宿に行くことになっている。4年生になるときにクラス替えがあるので、このクラスとして行く、最初で最後の合宿である。その合宿の最後の晩に、キャンプファイヤーをした。私は子どもたちに「みんなが大好きだよ」と、素直な気持ちを伝えた。キャンプファイヤーが終わり、部屋に戻ると、大勢の子どもたちが泣きながら近寄ってくる。「先生、今日のキャンプファイヤー、最高でした」「3年生でいる間の一日一日を大切に生活します」ふだんはそんなことを言いそうもない気が強い子ども、わんわん泣きながら自分の思いを一生懸命語ってくれる。思わずみんなで手を取って、消灯時刻も忘れて語り合った。

子どもたちの力は、その素直さにあると実感した。大人だったら変なしがらみや意地があって、頭が固くなりそんな簡単に変えられないことでも、よいと思ったら実に簡単に乗り越えていく。子どもってすごいなあと思った。そして、その素直な心は、自分を変え、相手も変えていく力を持っている。「素直ってすごいなあ」と、子どもに教えられる瞬間である。

